

社 会 科 教 室

第 161 号

平成 26 年度

香川県小学校教育研究会社会科部会
香川県小学校社会科教育研究会

継承から創造へ

「戦後70年」ということで、我が国はもとより世界中で「これまでの状況」を顧みて、「これからの在り方」について考えていこうとする機運が高まってきています。そうした中、内閣総理大臣の下、「20世紀を振り返り21世紀の世界秩序と日本の役割を構想するための有識者懇談会」が設置され、戦後の状況とこれからの在り方についての議論がかまびすしくなっています。

学校教育においても、平成27年度は、大きな転換点となるのではないかと考えています。教育の振興に関する施策の大綱を策定する総合教育会議の設置や教育委員会制度の変更などを定めた改正地教行法が、4月1日から施行されます。また、昨年11月20日には、文部科学大臣から中央教育審議会へ「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」が諮問され、学習指導要領改訂に向けた議論や作業が着々と進んできています。21世紀に生き、新しい時代に必要な力を子供たちに育むためには、「何を教えるか」という知識の質や量の改善はもちろんのこと、「どのように学ぶか」という、学びの質や深まりが求められるようになっていきます。資質能力の育成が重視される中、教育方法が学習指導要領にどのように反映されるのかが注目されています。

学校教育の在り方が求められている今こそ、私たちは「社会科とは何か」と改めて自問自答し、授業改善を図らなければならないのではないのでしょうか。

前号で紹介した『香社研30年史』を見ると、昭和22年(1947年)4月に学習指導要領社会科編試案が発表になり、その輪読会を行った古市昭義氏、佐柳正氏、神原萬吉氏らによる同好会が夏に発足しています。翌23年の小中高による組織や西讃社会科同好会の活動を経て、平成24年(1949年)春に、高松・坂出両附属を中心に「香川県社会科教育研究会」が発足しています。その後、全国的な教育思潮や学校を取り巻く状況の変化を踏まえ、先導的な教育実践を積み上げてきたのが香社研です。実践に裏打ちされた理論構築をめざした先輩の方々の熱意と努力により、香社研の礎と名声が築かれてきたのです。

私たちは、香社研という名とその実績について強い自負心をもつとともに、真摯に「社会科とは何か」を追究する団体として行動していきたいものです。

平成26年度は、定例研修会や夏季研修会、研究フォーラムなどの研究及び研修活動に加え、全国大会会場校での事前研修や授業研究、会場校連絡協議会の開催などを行ってきました。「研究推進に係る理論の整理や具体的な実践の積み重ね、大会運営等について、具体的かつ緻密な計画と作業が実務として求められる年」であった今年の実施状況を踏まえ、今後、次のような点について、各郡市社研の英知と力を結集し、香社研会員が一丸となって邁進する雰囲気を作成することが喫緊の課題であると考えています。

- 研究主題及び研究の方向性の共通理解と各郡市における教育実践の蓄積
- 実行委員会各部（総務部、研究部、庶務部、編集記録部、宿泊輸送部）の2年間を見通した組織編制と実働
- 会場校における事前研修会及び授業研究会への参加（年間2回）
- ※ 第1回授業研究会（平成27年6月16日(火)高松市立十河小学校
平成27年6月17日(水)観音寺市立観音寺小学校）

指導者：文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官 澤井陽介氏

全国大会は、香社研がこれまで積み上げてきた理論と実践を参加者に問うとともに、高い組織力を発揮し、「これからの社会科教育を考える契機になった」「会員一人一人の動きが心地よい大会だった」などの声が聞こえる大会にしたものです。香社研の伝統を継承するとともに、これからの社会科教育、いや学校教育の在り方を創造し、具体的に発信しようではありませんか。

香川県小学校教育研究会社会科部会
香川県小学校社会科研究会
(部)会長 野村 一夫

平成26年度事業報告

① 定例研究集会, 夏季研修会, 会場校事前研修会

【定例研究集会】

○ 6月定例会 (丸亀・仲善)

- ・ 月 日 平成26年6月14日(土) 9:30~12:00
- ・ 場 所 丸亀市岡田コミュニティセンター
- ・ テーマ 【丸亀】「自主と共生を育む社会科教育」
【仲善】「人間の営みに学び 広い視野育てる社会科学習の展開」
- ・ 提案者 【丸亀】乗松 直樹先生 (丸・飯南小)
第6学年 「天皇中心の国づくり」
【仲善】香川 卓也先生 (善・東部小) 藤田 啓明先生 (善・西部小)
第6学年 「元の大軍が攻めてくる」
- ・ 司会者 篠原 正義先生 (仲・四箇小)
- ・ 指導者 山内 秀則先生 (香川県教育委員会事務局義務教育課主任指導主事)

○ 7月定例会 (小豆・さ東)

- ・ 月 日 平成26年7月5日(土) 9:30~11:40
- ・ 場 所 香川大学教育学部附属高松小学校
- ・ テーマ 【小豆】社会認識を深め, 社会に関わる力を育てる学習
【さ東】思考力の育成をめざした学習プランの開発~子どもの問いをつくり, 深め, 広げる~
- ・ 提案者 【小豆】鶴羽美緒先生 (土・土庄小)
第6学年 「天皇中心の国づくり~聖徳太子の国づくり~」
【さ東】梅本明宏先生 (さ・長尾小)
第4学年 「ごみのしゅりと利用」
- ・ 司会者 六車 浩先生 (東・大内小)
- ・ 指導者 大高哲也先生 (香川県教育委員会人権・同和教育課副主幹(兼)主任指導主事)

○ 9月定例会 (坂出・綾歌)

- ・ 月 日 平成26年9月27日(土) 9:30~11:50
- ・ 場 所 坂出市勤労福祉センター
- ・ テーマ 分かる喜びを実感できる社会科学習の展開 ~日常的な板書計画の活用を通して~
- ・ 提案者 河野 富男先生 (綾・宇多津小)
第5年 「日本の水産業を考えよう」
- ・ 司会者 宇山 知昌先生 (綾・綾上小)
- ・ 指導者 山内 秀則先生 (香川県教育委員会事務局義務教育課主任指導主事)
唐木 裕志先生 (香社研OB)

○ 10月定例会 (三観)

- ・ 月 日 平成26年10月25日(土) 9:30~11:50
- ・ 場 所 マリンウェーブ
- ・ テーマ 個が育ち, 生きる社会科学習の創造 ~考える力を育てる社会科学習をめざして~
- ・ 提案者 出濱 大資 先生 (観・観音寺小)
古子 貴将 先生 (観・観音寺小)
第5学年 「わたしたちの生活と食料生産」
- ・ 司会者 大平 晃司 先生 (観・大野原小)
- ・ 指導者 小西 寛先生 (観音寺市教育委員会学校教育課主任指導主事)
前田 高次 先生 (香社研OB・三豊市詫間町民俗資料館館長)

【夏季研修会】

- ・ 月 日 平成26年7月28日(月)
- ・ 場 所 高松商工会議所会館
- ・ 内 容 提案発表, 高松社研実践発表, 各郡市社研実践発表
- ・ 提案者 本部提案 : 大嶋 和彦(香川大学教育学部附属高松小学校)
丸亀社研 : 真鍋 長嗣(高松市立十河小学校)

分科会Ⅰ：高松社研実践

分科会	単元名	授業提案者	指導・助言者
第3学年	市のようす	高松市立川東小学校 池田 康輔	綾川町立綾上小学校 教頭 福家 光洋
第4学年	水はどこから	高松市立十河小学校 真鍋 長嗣	丸亀市立城東小学校 教頭 小谷 修
第5学年	国土の地形や気候の特色と 人々のくらし	高松市立屋島西小学校 笠井 誉子	善通寺市立西部小学校 教頭 森 昭二
第6学年	武士の世の中へ	高松市立下笠居小学校 川田 美穂	三豊市立財田中小学校 教頭 安藤 通

分科会Ⅱ：各郡市社研の実践提案発表

学年	方策	単元名	提案者	指導・助言者
3年	④	のこしたいもの, つたえたいもの	観音寺市立柞田小学校 守屋 顕	香川大学教育学部 教授 伊藤 裕康
4年	① ⑦	事故や事件から暮らしを守ろう ー我ら筆岡防衛隊ー	善通寺市立筆岡小学校 尾崎 純一	香川県教育委員会 東部教育事務所 主任指導主事 池田 茂樹
6年	⑦	武士の世の中	丸亀市立垂水小学校 佐藤 南	東かがわ市立大内小学校 教頭 橋本 義人
6年	②	武士の世の中	坂出市立宇多津北小学校 橋本 美穂	高松市立植田小学校 教頭 市原 茂幹
4年	② ④ ⑤	市のようす ～あさのたんけん・はっけん・ ほっとけん隊～	高松市立浅野小学校 水口 純	観音寺教育委員会 学校教育課 主任指導主事 小西 寛
5年	① ④ ⑦	水産王国 ニッポン ～水産業のさかんな静岡県～	土庄町立土庄小学校 鶴羽 美緒	香川県教育委員会 義務教育課 主任指導主事 山内 秀則
4年	① ⑦	ごみのしよりと利用	さぬき市立長尾小学校 梅本 明宏	高松市立十河小学校 教頭 安倍 幸則

- ・ 講師 文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官
国立教育政策研究所教育課程研究センター教育課程調査官
「社会科の授業づくりの総点検」 澤井 陽介 先生

【会場校研修会】

○ 9月 十河小学校（高松）事前

- ・ 月 日 平成26年9月20日(土) 9:30～11:30
- ・ 場 所 高松市立十河小学校
- ・ テーマ 「十河の香り」を育み、社会に出る教育
～「板書」と「ノート」をつなぎ、社会認識を深めることに自信をもつ学習～
- ・ 内 容 指導案をもとに事前の勉強会を行う
- ・ 提案者 高尾 悠司先生（高・十河小）
第5学年 「これからの食料生産とわたしたち」
久保 祐亮先生（高・十河小）
第4学年 「きょう土をひらく」

■ 9月 十河小学校（高松）授業公開

- ・ 月 日 平成26年9月25日(木)
- ・ 指導者 帝京大学教授 中田正弘先生

○ 11月 十河小学校（高松）事前

- ・ 月 日 平成26年11月15日(土) 9:30～11:30
- ・ 場 所 高松市立十河小学校
- ・ 内 容 指導案をもとに事前の勉強会を行う
- ・ 提案者 秦 早織先生（高・十河小）
第6学年 「新しい日本・平和な日本へ」

■ 11月 十河小学校（高松）授業公開

- ・ 月 日 平成26年11月27日(木)
- ・ 指導者 帝京大学教授 中田正弘先生

○ 11月 観音寺小学校（観音寺）事前

- ・ 月 日 平成26年11月29日(土) 9:30～11:30
- ・ 場 所 観音寺市立観音寺小学校
- ・ テーマ 自ら社会に参画する資質・能力を高め、社会科の魅力を創る教育
～「参画モデル」の目を通して主観的に社会を見る学習の展開～
- ・ 内 容 指導案をもとに事前の勉強会を行う
- ・ 提案者 内田 真理子（観・観音寺小）
第4学年 「ごみのしよりと利用」

■ 12月 観音寺小学校（観音寺）授業公開

- ・ 月 日 平成26年12月8日(月)
- ・ 指導者 國學院大學教授 安野功先生

■ 1月 観音寺小学校（観音寺）授業公開

- ・ 月 日 平成27年1月24日(土)
- ・ 授業者 古子 貴将（観・観音寺小）
第5学年 「自然災害を防ぐ」
- ・ 指導者 國學院大學教授 安野功先生

平成26年度 香社研フィールドワーク活動報告

平成26年度のフィールドワークも例年と同様に、旅行会社の既製のプランにないオリジナルツアーを企画しました。教科書に掲載されている事例地を中心にめぐる1泊2日のフィールドワークを通して、歴史、伝統、文化や、人々の温かい心にふれることができました。

1 目的

- ① 教科書に掲載されている地域を巡り、教材研究を深める。
- ② 教科、世代を問わず香社研や教員同士の親睦を深め、ネットワークを広げる。

2 日程 平成26年8月23日(土)～24日(日)

1 日 目	8/23 (土)	高松駅＝坂出駅＝＝アサヒビール四国工場＝＝因島水軍城＝＝ 7:20 8:00 9:30 11:00 12:00 13:30 ＝大和ミュージアム＝＝懇親会＝＝＝ホテル(アークホテル広島駅南) 15:00 16:30 18:00
2 日 目	8/24 (日)	ホテル＝＝宮島口～～～宮島～～～宮島口＝＝＝岩国城・錦帯橋＝＝ 8:00 8:40 9:00～12:10 12:20 13:00 14:00 15:30 ＝(瀬戸大橋)＝＝坂出駅＝高松駅＝津田 SA 19:00 19:40 20:20

3 交通手段 貸し切りバス

4 見学地紹介

(1) 一日目

① アサヒビール四国工場

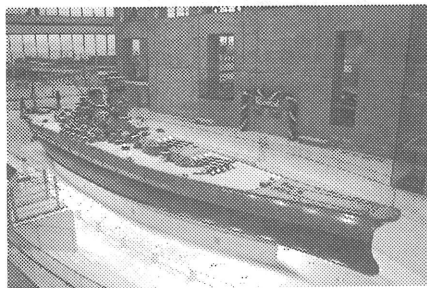
まず最初の見学地は、アサヒビール四国工場でした。休日と言うことで実際に工場は稼働していませんでしたが、ビールができるまでの工程を一つ一つ確認しながら見学することができました。徹底した品質管理だけでなく、おいしい水を供給するための森づくりにも取り組んでいるということでした。現在は、環境保全を考えた経営が求められていることも実感しました。見学の後には試飲です。おいしいビールの注ぎ方も教えていただきました。試飲のビールは普段飲んでいるビールとは違い、かなりの美味でした。

② 因島水軍城



2014年の本屋大賞を受賞した「村上海賊の娘」の舞台でもある因島に、全国で唯一の水軍城があるということで見学した。この城が、戦国時代に使われていたということではなく、昭和の時代に村上水軍の資料などを展示するのを目的に建設されたものだそうです。説明していただいた方は、村上水軍について非常に詳しく、もっとじっくりと話を聞きたいところであったが、時間が押し気味であったため次の見学地へと急ぐこととなった。

③大和ミュージアム



大和ミュージアムに着いた時刻が予定よりもかなり遅くなっており、見学時間が十分にとれなかった。広島の新爆ドームには何度か行ったことがあったが、呉は初めてであった。海軍の工場があったということで激しい空襲にあったこともあまり知らなかった。また、太平洋戦争だけでなく、日清戦争から続く海軍の歴史について多くの資料が展示されていた。欧米列強に追いつこうとする当時の日本人の思いを感じる事ができる施設であった。

(2) 二日目

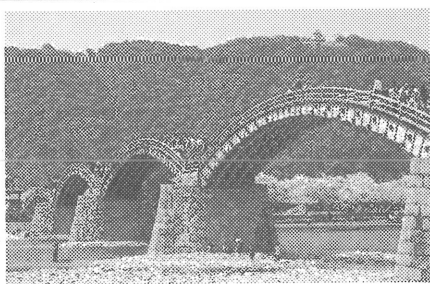
①宮島(厳島神社)



二日目は朝から宮島に向かった。少し雨が降ったが、傘をさそうかどうか迷う程度でたくさん降らずによかった。宮島には、多くの武道家がお参りに来ていた。見学するまで、なぜ海の上に建物があるのか不思議であったが、海から見える厳島神社の姿を見ると、瀬戸内海を通る船にとってはなくてはならないものであるという気持ちになった。宮島

名物「もみじまんじゅう」を焼く体験をした。観光客用に用意されたものであったが、紅葉の型に生地を上手にいれる人、説明を聞かずに自己流でする人、焼き加減が抜群に上手な人などそれぞれの性格が垣間見られた体験活動であった。おいしく焼きたてのもみじまんじゅうをいただいて、宮島とはさようなら。

②錦帯橋・岩国城



最後の見学地は、錦帯橋と岩国城。ここのガイドさんが、70歳ぐらいの方でしたが、ものすごくお元気で、現役の私たちがついて行くのがやっとでした。ここも見学時間が短いということで、無理を言って短縮版で説明していただきましたが、あのガイドさんでなければあの情報量の説明を聞くことはできなかった。岩国城にまつわる吉川広家エピソードも聞き応えがあった。

関ヶ原で徳川家康に騙された形になった広家が本気で家康と一戦交えるつもりで建てた城ということがその造りからも感じ取ることができた。錦帯橋を渡ったところに日本ソフトクリームの種類が多い店があり、なんと100種類以上もあった。

5 フィールドワークを振り返って

広島県で集中豪雨による土砂災害がおきた直後であり、直前まで開催をどうするのか考えたフィールドワークであった。新学期が8月の第5週から始まる学校やPTAの奉仕作業がある学校などが多くなり、県下の先生方が集まりやすい日の設定というのが難しくなっている。そんな中、「明日から学校」といいながら参加して下さった先生方、毎年必ず参加して下さっている先生方、ありがとうございました。今回の参加者は、確かに少なかったですが、一体感のあるフィールドワークになったのではないかと考えます。

次年度は、日程や見学地の設定を再度検討し直して、多くの先生方が社会に触れ、社会について語り合えるものをしていきたいと思います。

基礎テスト編集委員会

1 本年度の課題と年間計画

(1) 本年度の成果

- ・新しい教科書に対応した基礎・テストを作成することができた。
- ・東京書籍，教育出版の両方に対応した問題を作成することで，汎用的，総合的な社会科の見方・考え方を問う問題ができた。
- ・基礎の表紙絵を全県の児童に募集し，社会科への興味関心を高める。

(2) 活動報告

年	平成26年												平成27年		
月	4	5	6	7	8	9	10	11	12				1	2	3
作成予定							① ② ③ H27前期版作成								
								③ ④ ⑤ H27後期版作成							

【年間の活動】

	回	日 時	内 容	備 考
二十七年度前期作成	①	9 / 27 (土) 13:30～16:30	表紙絵選考会 担当決め 教科書分析	
	②	10 / 25 (土) 13:30～17:00	協議・作成	
	③	11 / 15 (土) 13:30～17:00	最終の話合い	併せて，後期版の役割分担を行う。
	提出	11 / 21 (金) 11 / 28 (金)	指導者必着 事務局黒田必着	12月1日に業者提出
二十七年度後期作成	③	11 / 15 (土) 13:30～17:00	担当決め (教科書分析)	
	③	11 / 29 (土) 13:30～17:00	協議・作成	
	⑤	12 / 13 (土) 9:00～12:00	最終の話し合い	執筆料，交通費支給(5回分) 印鑑必要
	提出	12 / 19 (金) 1 / 13 (火)	指導者必着 事務局黒田必着	1月14日に業者提出

編集作業では，次のように役割を分担し，編集作業を行った。

- 指導・編集責任者・原稿取りまとめ・・・教頭先生
- 基礎・テストの編集，原稿執筆・・・編集者
- 編集補助（事務的補助，研究的補助）・・・事務局

【社会科の基礎表紙絵募集】

全県から89点の作品応募。基礎テスト編集委員による厳正なる抽選の上，選考。
最優秀作品及び優秀作品については，来年度の社会科の基礎の表紙，裏表紙に掲載。

【入選者への授与品】

最優秀 8名 賞状，副賞（地球儀），カラーペン
優秀賞 16名 賞状，カラーペン

研究主題

自ら社会に参画する資質・能力を高め、社会科の魅力を創る教育

香川大学教育学部附属高松小学校 大嶋 和彦

I 研究主題について

1 研究主題設定の背景

日本は少子高齢化・グローバル化が加速的に進行している。この中で、学校はどう変わらなければならないのが課題である。まず、少子高齢化については一人一人の生産性を伸ばしていくことのできる教育が求められている。これまでの日本は、国内の市場を主な対象に商品を開発し、競争力を増しながら経済を成長させることができてきたが、これからは少子高齢化に伴い、それは望めない。今後は、日本の市場が縮小する中で世界を相手に仕事をしていく能力、世界に貢献していく能力をもつ人間づくりが求められている。一方、文部科学白書では、学校におけるいじめや体罰、学習意欲低下の問題、社会全体の規範意識の問題などの課題の解決が求められている。

つまり、グローバル化という点からは、自ら主体的に社会に参画しようとする子どもの姿が、また、いじめや学習意欲の低下等の問題については、学ぶ意欲をもち、子どもが生き生きと学ぶ社会科の授業づくりが求められているといえる。

そこで、香社研では、昨年度までに、社会認識をひらく再構成の学習の研究を基盤にした「社会的な見方、考え表し方、在り方の学びを社会参画につなぐ」こと、すなわち、「社会参画する」ことではなく、社会科が目指す「自ら社会参画を求める」ことの研究を進めてきた。

そのような折、文部科学省の「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会」から、次期学習指導要領の基礎資料として論点整理が出された。（以下、「論点整理」とする）それをもとにして各研究者から、様々な論が提議される中、児童生徒にどのような資質・能力を身に付けさせるかが大きな課題となっている。

この視点に立って本会においてもこれまでの研究を踏まえ、研究主題を「自ら社会に参画する資質・能力を高め、社会科の魅力を創る教育」と設定した。「資質・能力」を育成するために社会科のもつ魅力を重視して教育を創っていくことをテーマとして置き、研究を進めることとした。

次に、研究主題のもつ意味について説明したい。

2 研究主題のもつ意味

(1) 「自ら社会に参画する資質・能力を高める」ことについて

① 「資質」「能力」の概念整理

「資質」とは、「能力や態度、性質などを総称するものであり、教育は、先天的な資質を更に向上させることと、一定の資質を後天的に身に付けさせるという両方の観点をもつものである」とされており、「資質」は、「能力」を含む広い概念として捉えられている。「論点整理」では、「資質」と「能力」の相違に留意しつつも、「資質・能力」として、一体的に捉えている。

② 社会科が目指す資質・能力

小学校社会科の目標は、「社会生活についての理解を図り、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を育て、国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う。」とあり、どのような人間を育てようとしているのかということが、はっきり打ち出されている。

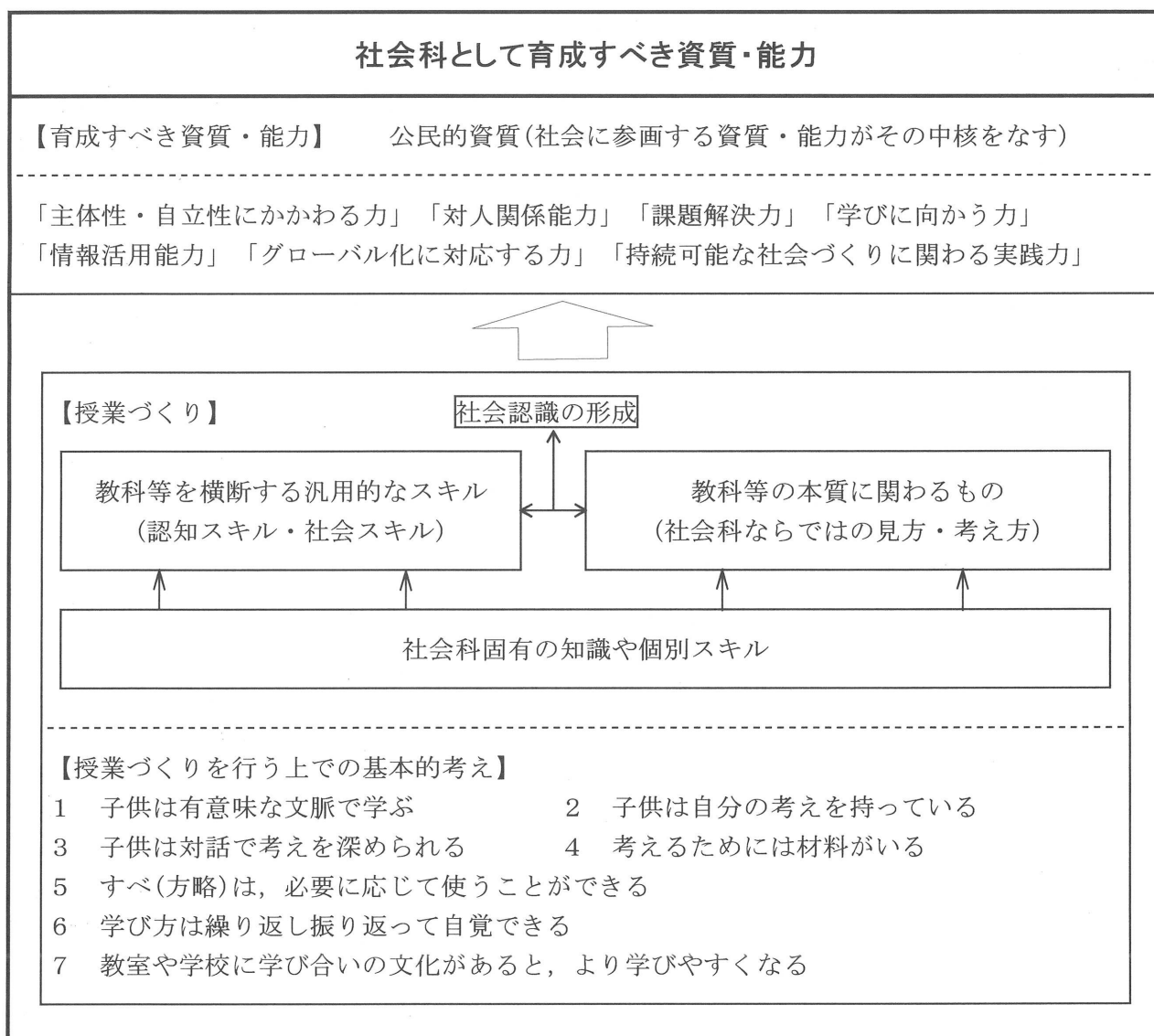
社会に参画する資質・能力は、公民的資質の中核をなすものであり、社会科の授業を通して高めていくことが重要である。また、それを高めていくためには、「論点整理」でも述べられているように

「主体性・自立性にかかわる力」「対人関係能力」「課題解決力」「学びに向かう力」「情報活用能力」「グローバル化に対応する力」「持続可能な社会づくりに関わる実践力」等の力を付けていくことが求められるだろう。

③ 資質・能力と内容の関係性について

国立教育政策研究所から出された教育課程の編成に関する基礎的研究報告書7「資質や能力の包括的育成に向けた教育課程の基準の原理」の第5章では、「資質・能力が教科等の内容に関する質の高い知識やスキルを含みつつ、それをいかに使うかというメタ認知や社会的なスキル、態度まで融合したものとして構想されている可能性を確認した。」とあり、また、「資質・能力が目標として育成可能であるとともに、教科等の内容理解に資質・能力が手段として活用できる可能性も示唆された。」とある。

資質・能力の育成を目指す中で各教科で扱ってきた内容との関係性の整理については、今後の検討を待たなければならない。いずれにしても、授業の中で内容を扱いながら資質・能力を育てていくといったこれまで香社研が取り組んできた授業づくりの在り方と様々な報告をつないで、社会科として育成すべき資質・能力を次のようにまとめた。



(2) 「社会科の魅力を創る教育」について

今、全国的に社会科の大きな課題になっていることは、社会科学習が「知識」の重視に偏り、学ぶ喜びを感じにくくなってきていること、また、真の「理解」が伴っていないため、学ぶ価値が実感で

きにくくなっていることなどが挙げられる。

一部の社会科を専門とする教員による授業では、教科書教材を基本にしながらも地域教材の活用を図り、内容を再構成して、子どもが主体的に学ぶ工夫を取り入れながら授業づくりを行っているのに対して、社会を専門としない教師が行う授業の中には、「教科書を読み内容をノートに書く学習」

「教科書と教科書指導書により解説しながら板書する学習」「教科書と『社会科の基礎』（ワーク）による学習」など画一的で受け身的な学習が行われている場合も多く見られる。

このような現状から考えると、社会科の授業を子どもたちの主体的な学習、意欲を深めていく学習、そして探究することに喜びをもつ学習にする必要がある。このような授業づくりを目指していくところに、先に述べたいじめや学習意欲の低下等の課題解決の糸口が見えてくると考えている。

「社会科の魅力」については、社会科発足当初の初期社会科の目標である、「社会の様々な問題について、自主的自律的に思考判断する能力を育てる」ことにより、その経緯をたどり社会科を見つめ直すことで、本来あるべき社会科授業の在り方が見えてくる。

香社研では、次に挙げる3つの視点を社会科の魅力として捉え、研究を深めていきたい。

視点1 目指す子ども像とつかませたい社会認識の明確化

視点2 社会参画を意識した指導計画の作成

視点3 子どもが実感的な問題意識・課題意識をもち、主体的に意欲をもって課題を解決する学習の在り方

視点1については、社会科学習を通してどのような子どもを育てたいのか、目指す子ども像を各学校で明確にしておくことが必要である。このことが他の教科とちがう大きな魅力となっている。社会科が戦後一貫して求めてきたのは、「平和で民主的な国家及び社会の形成者」である。このことを念頭に置き、各校なり子ども像を描くことが大切である。また、そのような子どもを育てるためには、1つ1つの単元を通してどのような社会認識をつかませたいのかを明確にしておく必要がある。それにより、教材の扱いや単元の組み立て方も大きく異なってくる。

視点2については、教師自らが指導計画を作成していくことが求められている。また、それは、1つの単元だけではなく、多くの教師の協同によって全ての単元において、よりよい社会の形成への参画を意識した指導計画をつくっていくことが重要である。かつての教師集団においては、「〇〇プラン」として競って自分たちの理想とする指導計画の作成が行われていた。そこに社会科教師としての魅力を感じていたのである。今一度、現場教師がチームを組んで指導計画を作成する教師力をもてるようにしたい。

視点3については、冒頭でも述べたように、単元や1時間の授業の中で、いかに子どもたちが意欲をもち、主体的に取り組んでいけるような学習にしていくかということである。主体的に学んでいくことは、教師の一方的な教授とは異なり、自らが思考して知識や概念を獲得していくことに他ならない。教科の本質も大切にしつつ、教科を横断するような汎用的スキル(認知スキルや社会スキル)も念頭に置き、研究を深めていきたい。

香社研では、このような3視点を通して、これまでの社会科研究を振り返り、香社研の伝統と研究の積み上げの上に、社会科の魅力を充実させることにより、自ら社会に参画する資質・能力を高めていき、全国大会においてその成果を発信していきたい。

Ⅱ 研究主題探究の方策

1 「自ら社会に参画する資質・能力を高めること」についての方策

(1) 「社会参画」の意義

平成18年に、59年ぶりに教育基本法が改正され、教育の目標に「公共の精神に基づき、主体的

に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うこと」が新たに盛り込まれた。それを受けて、平成19年の学校教育法の改正により、義務教育の目標にも同様なことが規定された。

「社会参画」という言葉が一人歩きをしている感があるが、その前提としての「公共の精神」がまず大切にされなければならない。「公共の精神」とは、社会全体の利益のために尽くす精神、まさに国や社会の問題を自分自身の問題として考え、社会の他の人々と一緒に協力し合いながら社会を形成していく精神のことを指す。社会参画という前に公共の精神や公正な判断力、あるいは社会に向ける関心などを教育活動全体で育むことが大切である。社会参画はその先にあるものである。

これまでの日本人は、ややもすると国や国家はだれかがつくってくれるものという意識が強かったのではないだろうか。これからは、国や社会の問題を自分自身の問題として考え、そのために積極的に行動していくことが大切である。自分から積極的に社会の形成にかかわり、よりよい社会をつくっていくんだという自覚をもつこと、それがいわゆる社会参画である。

(2) 自ら社会に参画する資質・能力を高めることについて

自ら社会に参画する資質・能力を高めるためには、授業において次のことを考えながら授業を行うことが大切になってくる。

① 社会的事象の確かな理解

よりよい社会を目指して取り組む人々を「参画するモデル」として取り上げる。実社会に生きる人々がどんな目的で、どんな願いをもって、どんな働きをしたのかなど、社会的事象の意味を理解することが大切である。

② 汎用的スキルの育成

社会は、様々な働きが相互に関係し合って、課題を解決してきている。そのため、「多面的に考える」「人ごとではなく将来にわたって自分の関わり方を考える」「バランス感覚をもって判断する」「意見交換ができる」といった能力を育む必要がある。

③ 社会的な見方や考えから自分の在り方を考える

社会的事象の意味をとらえる見方、考え方を養うことによって、自分の社会に対する働きかけを見つめ直し、自分の在り方について考えることができる。協働への糸口を見つけ、かかわろうとすることが大切である。

小学校における授業では、「あなたにできることは」と拙速に答えを求めるのではなく、その前提としての社会的事象の確かな理解や社会に出たときに必要とされる社会的なスキルの育成が重要になってくる。また、社会的事象の確かな理解を通して見方・考え方をしっかりつかみ、そこから価値判断・意思決定し、自分たちのできることの効果や実現性を吟味し合う学習が、参画への意欲や態度の形成につながっていくのである。

(3) 自ら社会へ参画する資質・能力を高める授業づくりについて

社会的な在り方を社会科学習で学び、それを現実社会につなぐことが、社会への参画への意識の高まりとともに求められている。社会科学習では、これまで述べてきたように社会への参画の活動そのものを含むものではないが、参画への意欲を高めるために現実の社会とつなぐことは重要なことである。ここでは、社会参画につながる授業づくりの一例を示しておく。

- 地域の抱える問題の解決方法を話し合う。
- 地域のよりよい発展のための方策について話し合う。
- 学んだことをもとによりよい社会づくりに向けて自分たちでできることを話し合う。
- すばらしい業績を残した人を参画モデルに自分たちの在り方を考える。
- 過去の人や集団、組織の問題解決や知恵に学ぶ。
- 他者の立場に立ったり、立場を変えたりして物事を関係的に捉える。
- 国家の一員として、国際社会における日本の在り方を考える。 等

これ以外にも単元によって様々な活動を工夫することが考えられる。大切なことは、小学校社会科の授業を通して子どもたちに参画への意欲を高めることである。

こうした積み重ねが、将来、公民的資質の基礎を培うことにつながり、「望ましい社会を創造する能力」となってくると考えられる。

2 「社会科の魅力を創る」ことについての方策

社会科の魅力のうち、香社研では次に挙げる3つの視点を大切にしたいと考えているが、次期学習指導要領の改訂作業に伴い、「再構成の学習論」に資質・能力の育成を考慮し、改善を加えることになる。

視点1 目指す子ども像とつかませたい社会認識の明確化

視点2 社会参画を意識した指導計画の作成

視点3 子どもが実感的な問題意識・課題意識をもち、主体的に意欲をもって課題を解決する学習の在り方

ここでは、視点ごとに、これまでの香社研の研究とつないで現時点における研究の方向性について説明を行いたい。

(1) 社会科の魅力(視点1について)

視点1 目指す子ども像とつかませたい社会認識の明確化

ア 「社会認識」の考え方

社会認識をつかむということは「社会現象」について事象間のつながりを発見し、その間に横たわる論理を自らが構成していくことである。社会の具体的な現象を自ら分析し、その過程を通して社会についての認識を確かなものにしていく。この認識は単に事実の把握・理解ということではなく、目指す子ども像に結びつくものである。社会に参画する資質・能力を高めるためには、この單元ではどのような認識をつかませたいのか、教師が明確な意図をもつことが必要になってくる。

また、この認識は、教師による単なる教授によってはつかむことはできない。子どもたち自らが主体的に学ぶ中でこそ身に付くものである。それは、主体の中に矛盾や対立を意識化することから始まる。この矛盾や対立の意識を出発点として子どもの力による問題解決的な学習を通して、理解が深まっていく。それは知識の単なる集積ではなく、新しい問題や事態を切り開いていく汎用的なスキルをつくることでもある。教師は、「何を知っているか」から「何ができるようになったか」を求めていく必要がある。

イ 社会認識の視点と内容

一口に社会認識といってもその捉え方は人によって様々であり、そのままでは授業づくりに生かしていくことが難しい。そこには、いくつかの切り口(視点)が必要である。香社研では、公民的資質を育てるという観点から、次の4つの視点を置き、その下に單元ごとの細かな内容を置くこととした。教材研究の段階からどの視点・どの内容から迫っていくかを明確に意識し、授業づくりを行っていくことが大切になる。

生活科・社会科の目標と社会認識の関連

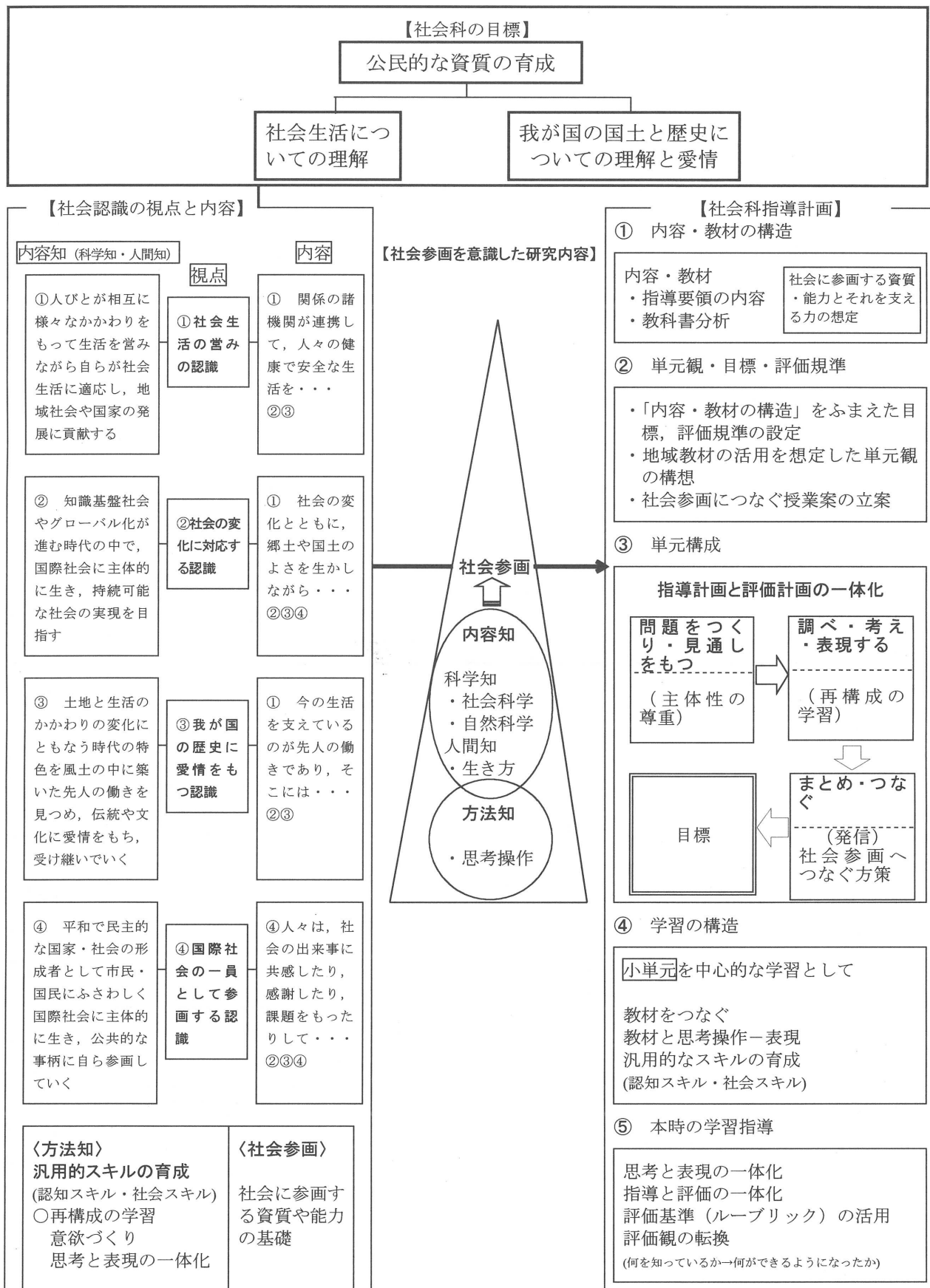
生活科の目標	社会科の目標	社会認識	
自立への基礎を培う	公民的資質の育成	〈内容知（科学知・人間知）〉	
(1) ・自分と身近な人々及び地域の様々な場所、公共物などのかかわりに関心をもつ ・地域のよさに気付き、愛着もつ ・集団や社会の一員として自分の役割や行動の仕方について考え、安全で適切な行動ができる	社会生活についての理解	① 人びとが相互に様々なかかわりをもって生活を営みながら自らが社会生活に適応し、地域社会や国家の発展に貢献する。	視点1 社会生活の営みの認識 ◎ 私たちは、人や物との関わりの中で、暮らし（生活）を営み、願いをかなえる努力をすること
	我が国の国土と歴史についての理解と愛情	② 知識基盤社会やグローバル化が進む時代の中で、国際社会に主体的に生き、持続可能な社会の実現を目指す	視点2 社会の変化に対応する認識 ◎ 社会の変化に目を向け、広い視野に立って自分の考えをもつ
		③ 土地と生活のかかわりの変化にともなう時代の特色を風土の中に築いた先人の働きを見つめ、伝統や文化に愛情をもち、受け継いでいく	視点3 我が国の歴史に愛情をもつ認識 ◎ 先人の働きに人間としての生き方や在り方を求める
	(3) ・身近な人々、社会及び自然とのかかわりを深める ・自分のよさや可能性に気付き、意欲と自信をもって生活する	公民的な内容	④ 平和で民主的な国家・社会の形成者として市民・国民にふさわしく国際社会に主体的に生き、公共的な事柄に自ら参画していく
		〈方法知〉	
		再構成の学習を「意欲」「思考操作」「評価」から組織し、主体的に学ぶ力を育成する。	再構成の学習を組織し、主体的な学習を進める中で、「思考と表現」「指導と評価」の統一を図り、言語活動の充実を目指す

社会認識の視点と内容（試案）

視 点	事項(指導要領の内容から)	視点の内容
視点 1 社会生活の営みの認識 ◎ 私たちは、人や物との関わりの中で、くらしを営み、願いをかなえる努力をすること	- 人々の健康で安全な生活を守るために、関係の諸機関が連携して政治が行われている - 地域では、人々にとって健康で安全な環境がある - 地域の人々の生活が、変化・発展していくため先人の働きがある - 地域社会に対する誇りと愛情をもつ	① 関係の諸機関が連携して、人々の健康で安全な生活を支えている ② 人々の生活が変化し発展する中で、人々の協力や先人の働きがある ③ 私たちは地域とかかわり、誇りと愛情をもつことが大切である
視点 2 社会の変化に対応する認識 ◎ 社会の変化に目を向け、広い視野に立って自分の考えをもつこと	- 身のまわりの生活は、地域・国土と環境とが互いに絡み合っている - 自分たちの生活は、他地域や外国とのかかわりをもちながら営まれており、人と物の流れを通して見るのが大切である - 地域社会の社会的事象の特色や相互の関連について考える - 我が国の国土の様子、国土の環境と国民生活との関連について考える - 我が国の産業の様子、産業と国民生活との関連、情報化の進展の意味について考える - 環境の保全や自然災害の防止の重要性について関心を深め、国土に対する愛情をもつ - 持続可能な社会の実現を目指す	① 社会の変化とともに、郷土や国土のよさを生かしながら、人々は生産や消費などで多くの課題に立ち向かって努力している ② 人々はよりよい社会を築くよう、環境・情報・福祉・防災などの課題に協力・連携して取り組んでいる ③ 持続可能な社会を目指す取り組みを進めることが大切である ④ 社会事象は相互に関連しており、日常の動きに目を向け、その事象のもつ意味を考えるよう努める
視点 3 我が国の歴史に愛情をもつ認識 ◎ 先人の働きに人間としての生き方や在り方を求めること	- 地域の人々の生活の変化や地域の発展は、先人の働きによるものであり、人々の願いでもある - 国家・社会の発展に大きな働きをした先人の業績や優れた文化遺産の理解を深める - 我が国の歴史や伝統を大切にし、国を愛する心をもつ	① 今の生活を支えているのが先人の働きであり、そこには人々の知恵や願いがある ② 郷土や国の発展に尽くした先人の業績や文化遺産を大切にし、受け継ぐ ③ 我が国の時代の特色をもとに歴史や伝統・文化に誇りをもつ
視点 4 国際社会の一員として参画する認識 ◎ 国際社会の一員としての自覚をもち、社会事象のもつ意味を考えること	- 身の回りや地域の具体的な事例を調べ、感動したり、共感したりして、日本人としての自覚をもつ - 地域社会の一員として社会事象の意味をより広い視野から考え政治の働きに関心をもつ - 平和を願う日本人として世界の国々の人と共に生き、互いの文化を尊重し、国際社会における我が国の役割を自覚する - 公共的な事柄に自ら参画していく資質や能力をもつ	① 人々は、社会の出来事に共感したり、感謝したり、課題をもったりして社会を発展させようと努力している ② 国際社会における我が国の役割の現状から地域社会の一員としての自覚をもつ ③ 平和を願う日本人として、世界の人々と共に生きることの大切さを自覚する ④ 公共的な事象に、自ら参画し、よりよい社会を形成しようとする

(2) 社会科の魅力(視点2について)

視点2 社会参画を意識した指導計画の作成



ア 社会科指導計画づくり

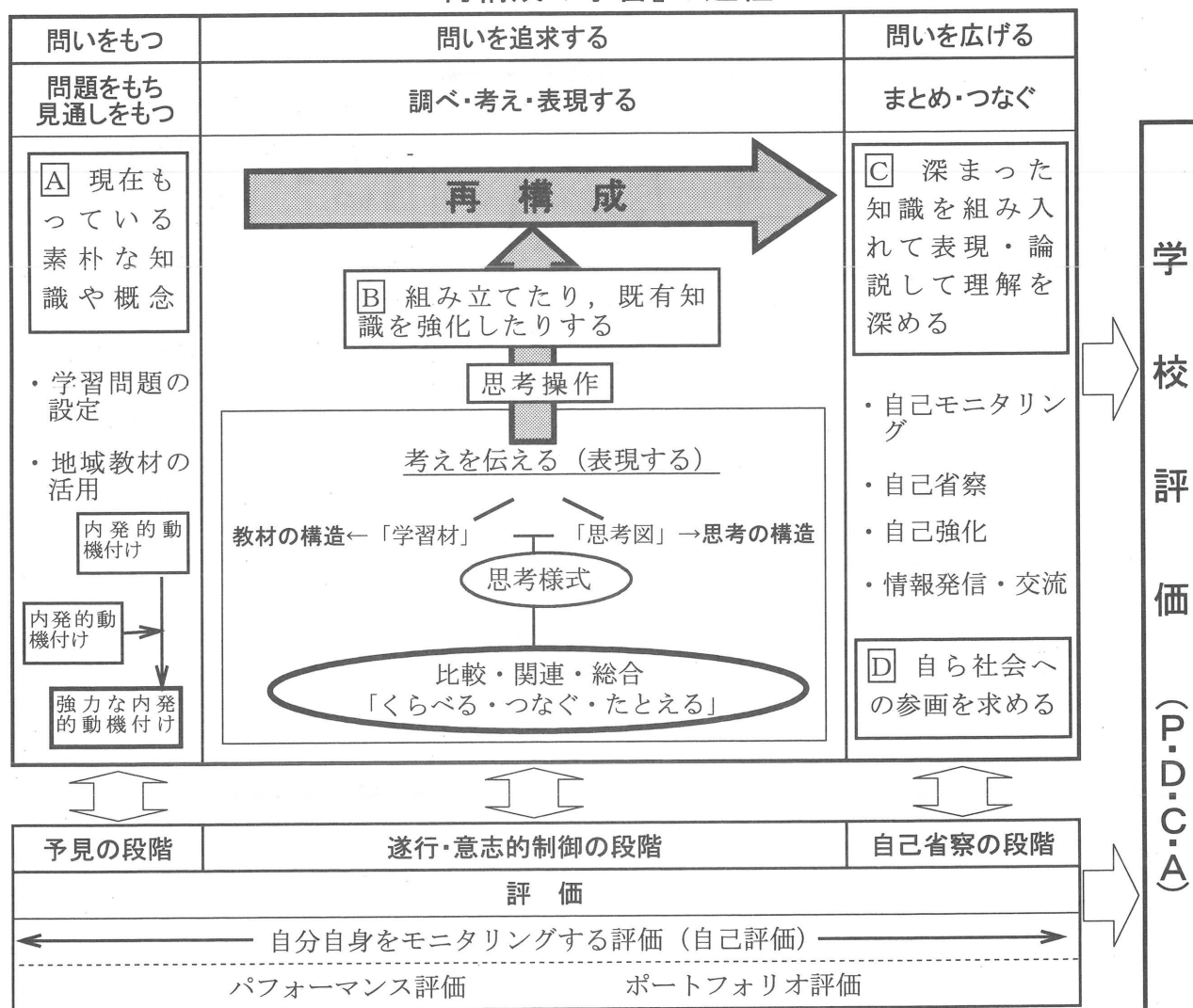
社会科指導計画を①「内容・教材の構造」②「単元観・目標・指導計画」③単元構成④「学習の構造」⑤「本時の学習指導」の5つの内容で構成することにした。前ページの図を見ていただくと分かるように、社会認識の視点と内容を踏まえ、社会参画を意識した計画となっている。

まず、①「内容・教材の構造」では、教科書分析と地域教材の開発を行い、その教材が、どのような知識の構造になるのかを図に位置付ける。基底となる事項、関連する事項、発展的な事項に分類・整理を行い、どのような単元づくりが可能か検討する材料とする。この段階で、社会に参画する資質・能力、さらにはそれを支えるどのような力を育てていけばよいのか明確にしておくことが大切になる。②「単元観・目標・指導計画」においては、先に述べた社会認識の視点を念頭に置きながら、単元観や本単元における目標を明確化していく。そして、③単元構成においては、社会への参画を意識した授業の組み立てを考えていく。しかし、教師の意図性だけで単元化を図るのではなく、子どもの主体性を生かしながら単元づくりを行っていくことが重要になってくる。④「学習の構造」においては、子どもの思考場面を想定し、どのような学習材を活用して子どもに思考させていくのかを考えていく。思考を通して概念を獲得する場を教師が想定し、支援を考える場としている。認知スキルや社会スキルの両面から汎用的なスキルが身に付くよう考えることが重要である。そして、最後に⑤「本時の学習指導」を計画していくのである。本時の学習指導については、視点3のところでも詳しく述べたい。

香社研では、今まで述べてきた社会科の魅力に立って、『再構成の学習』により自ら社会へ参画する資質・能力を高める教育を創るカリキュラム（指導計画）を求めている。

イ 「再構成の学習」論について

「再構成の学習」の過程



次に、単元の大きな流れについてみていきたい。学習は、3つの段階をサイクル活動として展開する。3つの段階とは、「予見」「遂行・意思的制御」「自己省察」の段階である。大まかに言えば、「予見」は学習場面を設定し、見通しをもって取り組む計画を立てる段階、「遂行・意思的制御」は思考と表現の統一により再構成を図ることによって思考力を育てる段階、「自己省察」は、社会への参画につないだり、総括的な評価を入れた自己評価をしたりする段階と言える。この3つのサイクルが自己調整の過程であり、このサイクルを通して「自己効力感」を育てていくことが主体的な学びへとつながっていく。

具体的に説明すると、まず、予見の段階では、学習場面を設定し、取り組みの計画を立てる。自己効力感をもって目標設定・課題設定し、方略プランニングと合わせて計画する。遂行・意思的制御、自己省察の段階においては、自己モニタリングをしながら自己評価、自己強化をするという自己調整を図る学習を目指している。

思考力は、図のように、**A**「現在もっている素朴な知識や概念」を、**B**「組み立てたり、既存知識を強化したり」して、**C**「深まった知識を組み入れて表現・論説して理解を深める」よう再構成することによって育てられる。その過程の活動が、思考様式の活動であり、自分自身をモニタリングによって自己評価しながらの活動になる。このような力は教科を越える汎用的なスキルとなり得るものであり、大切にしていける必要がある。

D「自ら社会への参画を求めること」とは、社会的な見方・考え方・在り方の学びを現実の社会につなぎ、一人一人が、社会の一員としての自覚をもち、参画につながるような意識をもったり、単元によっては、自らの活動や態度で示していく姿を求めているものである。

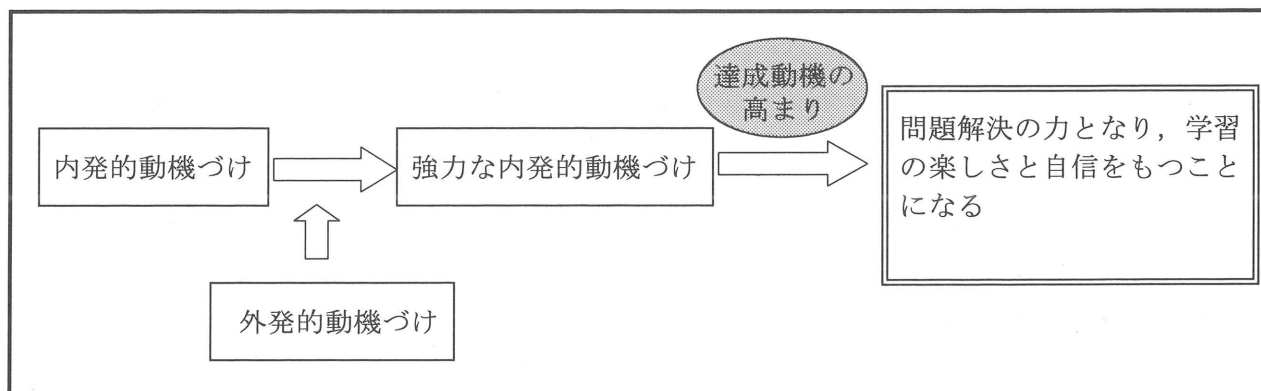
(3) 社会科の魅力〈視点3について〉

視点3 子どもが実感的な問題意識・課題意識をもち、主体的に意欲をもって課題を解決する学習の在り方

子どもが実感的な問題意識や課題意識をもち、主体的に意欲をもって課題を解決する学習の喜びややる気をもつことは、授業づくりの上でとても重要なことである。「育成すべき資質・能力 一論点整理」の中においても「主体性・自律性にかかわる力」「課題解決力」「学びに向かう力」として大切にされているところであり、社会参画にもつながる力である。このことを達成するために、次の4つの点を大切にしたい。

ア 主体的な意欲をもって取り組むための方策

主体的な意欲をもって取り組むことは、実感的な問題意識・課題意識をもつこと、課題を解決する学習の喜びと自信をもつことなど、学習過程全体に機能する。この主体的な意欲をもつ大きな力は、「内発的動機づけ」と「外発的動機づけ」によるもので、この2つの動機づけの関係は、次の図に示すとおりである。



問題解決に立ち向かうため、自分のもっている経験や知識をもとにした「内発的動機づけ」を外発的

な情報や新たな体験による「外発的動機づけ」によって、一層強力にしていくことが、主体的に意欲をもって取り組む源になる。このことを、もう少し詳しく述べておく。

子どもは、対象に思いや願いをもつことができれば、自ずと意欲が高まり、自ら進んで活動したり、活動そのものに喜びを感じたりして、主体的にねばり強く活動する。それは、何かやりがいのあることを成し遂げたいという欲求、達成動機があるからである。「動機づけ」とは、何らかの行動を引き起こし、ある方向に向け、それを持続させる過程と定義されている。また、「達成動機」とは、活動の結果、成功や失敗として表れるような場面において、できるだけ高いレベルでものごとを成し遂げようとする動機で、いわゆる「やる気」である。そして、達成動機が高い子どもは失敗を恐れず成功を求め、自分の能力に適した少し難しい課題に挑戦する。一方、達成動機の低い子どもは、失敗を避けようとする気持ちが強く、確実に成功する課題か、ほとんど成功の見込みがない課題を選ぶと言われている。つまり、授業づくりにおいては、この達成動機を大切にしたい。授業づくりに置き換えると、授業のゴール像が描け、単元を通した見通しをもつことと言い換えることができる。

イ 実感的な問題意識や課題意識をもつための方策

実感的な問題意識をもつことを、学習過程の①問いをもつ、②問いを追求する、③問いを広げるといったそれぞれの段階に分けて考えることができる。

① 問いをもつ段階におけるポイント

学習に対する意欲は、問いをもつ段階においても、子ども自らが生み出すことが大切である。この段階では、社会事象に対して多様な興味や関心を示したり、問題追求への意欲を育てたりすることが中心となる。

そこで、どのような場合に、子どもが知的好奇心を示すのかをよく吟味しなければならない。知的好奇心を生み出す背景には、豊かな体験やそれまでの学習経験や外部資料が存在する。そのため、体験の場を設定したり自分の生活を掘り起こしたり、他の情報によったりして、目の前の社会事象と体験や既習経験とをつないで、その中に矛盾や共通点を見いだせるように援助することが必要である。

② 問いを追求していく段階におけるポイント

最初にもった問いを、いかにして深め、追求していけるかがこの段階の課題である。問いが明らかになると子どもは意欲を示さなくなる。そのため、教師は問いをよく吟味し、深まりのある価値ある問いになるように導くとともに、表現活動を中心に据えながら、学び方を援助したり、相互交流の場を工夫したりしていくことが大切になる。

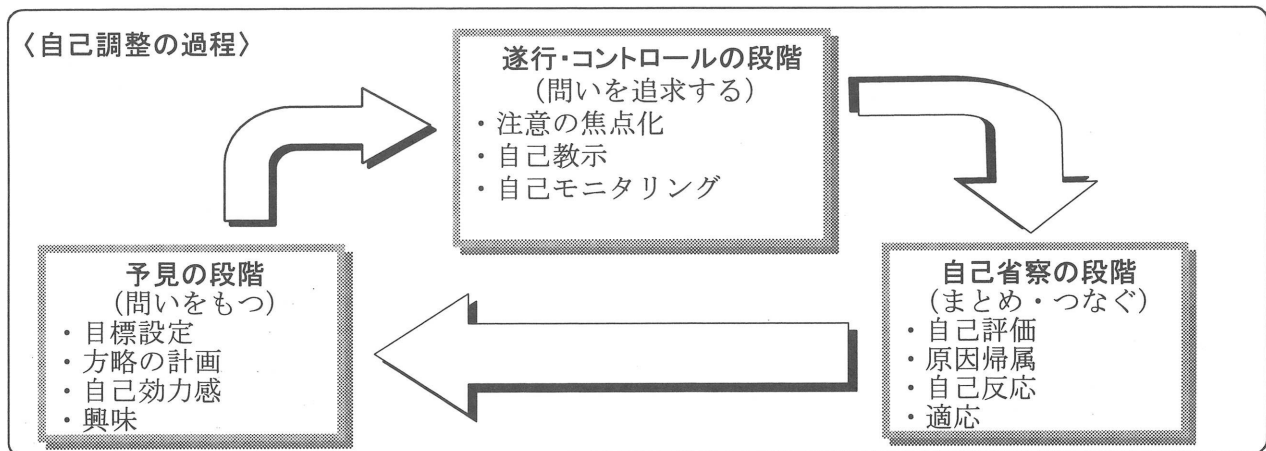
この問いを追求する段階では、実感的な課題意識をもって課題を解決していくために、2つの過程を通る。1つは実感的な課題を解決していくために必要な基礎・基本の事項について教科書で学んでいく習得の過程である。もう一つは、習得した内容からより深まった課題をつくり、解決していく過程である。これは、活用の過程といえるものである。これまでの研究とつないで考えると、習得の過程においては、教科書教材の活用を、活用の過程においては、地域教材の活用を図ったより焦点を絞った課題に子どもたちが取り組んでいくことになる。こうすることで、子どもの追求意識が深まっていく。

③ 問いを広げる段階におけるポイント

意欲が継続していくことで、問いはさらに深まり広がっていく。その場合、自分の伸びを認め、自信をもつことでの意欲づくりが大切である。生きて働く力ということが言われるが、学んだ事柄をもとに社会の一員としての自覚を生み出し、参画へつながる課題意識をもつことが大切である。社会への参画を考えると、この段階をどう設定するのかが（ゴールをどう設定するかが）、単元づくりの上で非常に重要になってくる。

ウ 課題を解決する学習の喜びと自信をもつための方策

子ども達が知識や技能を学び、受容していくことだけでなく、子ども自らの課題に基づき、知識を再構成し、生きて働く知識や技能として課題を解決する過程で、自己調整しながら自分の伸びを喜び、自信をもつよう努力したことを自己評価する学習を香社研では目指している。



「自己調整」とは、目標到達を目指し、思考や感情、方略行動を自らが引き起こし、自己の内面を組織的、計画的に機能させていくことを指している。そして、自己調整は、図に示すとおり、「予見の段階」「遂行・コントロールの段階」「自己省察の段階」の3段階の循環のプロセスにより行われる。この過程は、香社研の再構成の学習の基本的な枠組みとなる。この自己調整の過程こそが、自ら参画を求める子どもをつくっていくとも言える。

学習評価の研究として捉えると、評価は学習過程における「自己調整」を図る過程としてとらえることができる。すなわち、結果主義の評価ではなく、学習の過程における「過程主義」に立つ評価である。自己評価により、自分で自分の学習をモニタリングしながら学んでいくことで、自ら学ぶ資質や能力も高まってくる。

エ 思考力の育成に向けた方策

かつて、社会認識を深める学習論が唱えられた頃には、思考力の育成に向けて「思考操作」の研究が注目された。この当時から社会認識を深めるための思考力の育成が重視されていたことが分かる。その後、平成20年度の学習指導要領では、「思考と表現の一体化」とそれに伴う「言語活動の充実」が課題となってきた。子ども主体の学習とは、子ども自らが思考し、知識や概念を獲得していく学習に他ならない。

思考力を育てるとは、物事を構造的に把握する態度を育てることである。構造的な把握を行うために、種類や用途、場所、時間経過などで分析したり、類別したり、関係付けたり、条件を変えたりしながら、思考そのものが特色としてまとまっていなければならない。思考力を育てることは、知識を構造化している過程としてとらえることが大切である。

つまり、思考力を育てるために大切なのは、正しい知識の理解にあたって、過ちやつまずき、意識のずれを自分で発見して、それを修正していく過程である。この自己評価を伴う活動は、思考の構造の中に確実に組み込んで、より正しく深い理解を進めていくことになる。これは「思考力の内面化」と呼ばれている。

思考の質的な発達を促すためには、活動がある点でせき止められるような状況に立たせることが必要である。このせき止められる状況は、社会的事象の矛盾や対立の場面であり、課題や学習問題の設定などの学習活動に生かしていくことで、学習に意欲的に取り組むようになり、飛躍的な発展にもつながってくる。子どもの思考の過程を図示すると次のページのようになる。

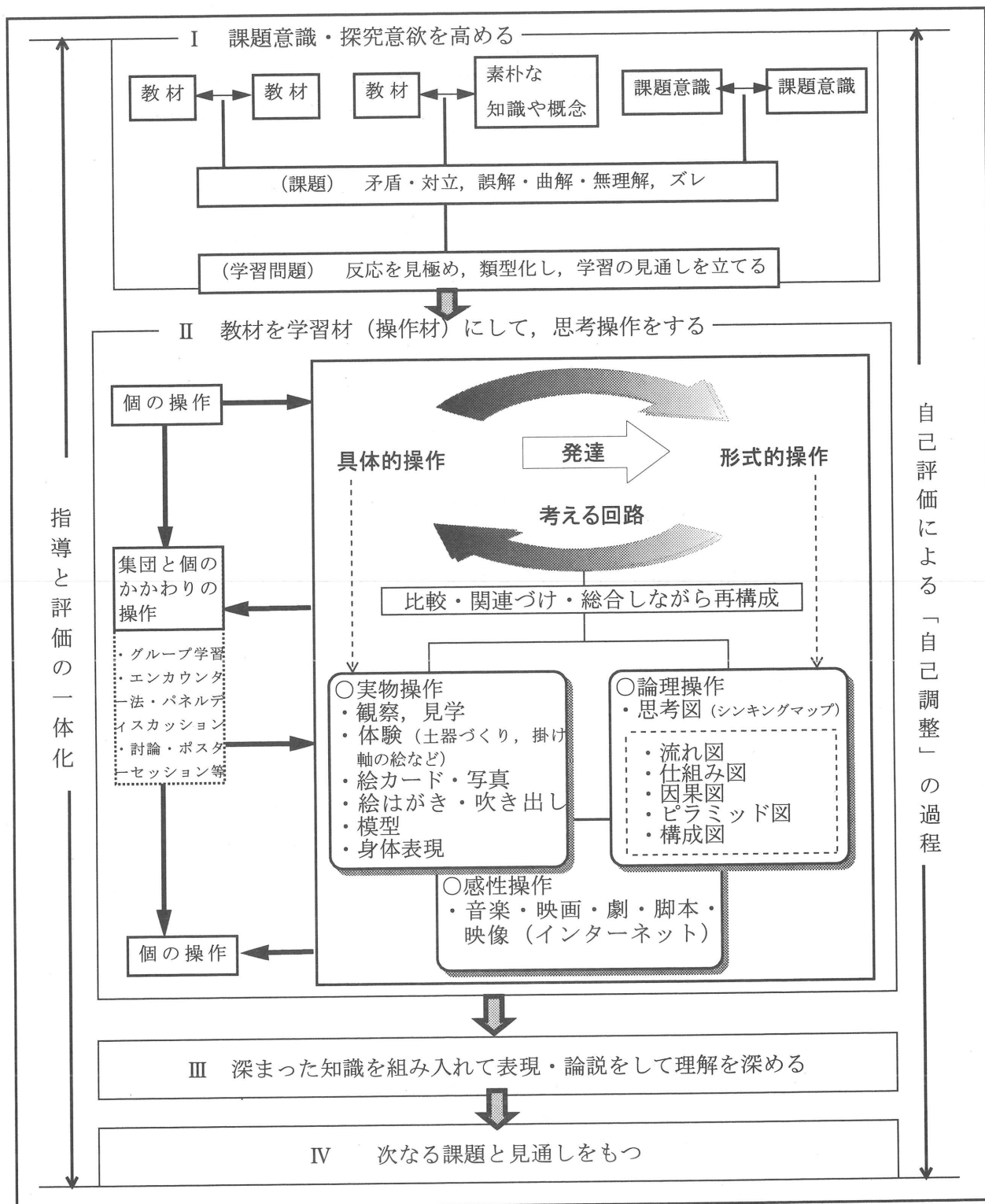
まず、教材の矛盾や対立から課題意識・探究意欲を高める。そして、反応を見極め、類型化し、学習の見通しを立てていくのである。そして、教材を子どもたちが操作できる学習材にして、集団と個のかかわりを考えながら思考操作を行う。比較・関連・総合しながら再構成することにより、自らの力で知識を概念化していくのである。

このように、主体的に自ら学びを求め、新しい知を創造していく過程こそ、これからの世の中を生きていく子どもたちにとって必要なものである。

このような思考の過程は、教師にとっても見えにくいものである。そこで、学習材の開発に合わせて、「思考の構造」(子どもが思考する道筋)を明らかにすることに従来から取り組んできた。その中心としたのが、「思考図」(シンキングマップ)の活用である。このことによって、「思考と表現」の一体化による活動の充実を図ってきた。今後も積極的に活用していきたい。

下に、香社研が考える子どもの思考の過程について示しておく。

〈子どもの思考の過程〉



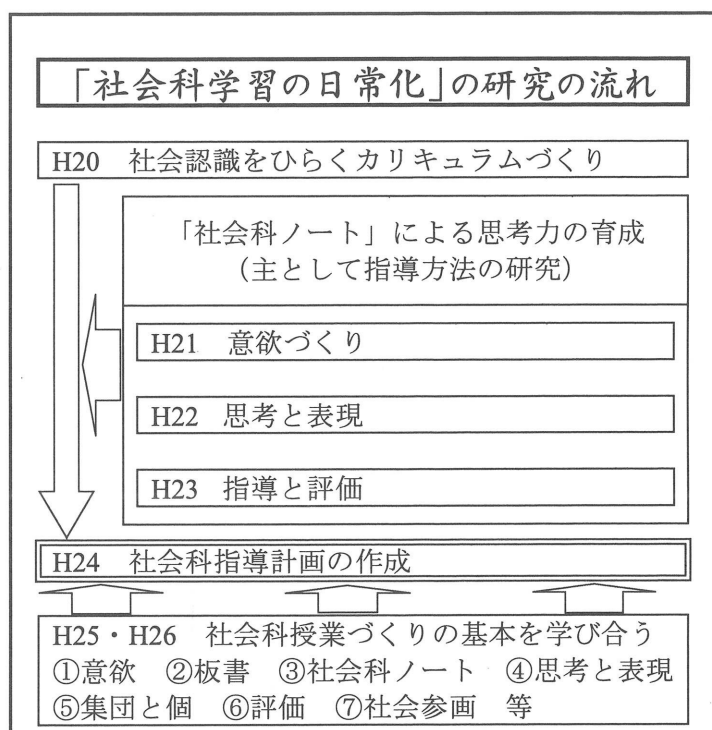
Ⅲ 研究主題探究の具体的研究内容・方法

1 社会科授業づくりの基本を学び合う研究内容と方法

(1) 研究の継続を踏まえて

社会科授業の現状を改善したいという願いから、右の図のように「社会科授業の日常化」に向けた研究主題を設定し、現在まで研究を進めてきた経緯がある。

平成20年度まで続けられてきた社会科ノートを活用、教科書の活用の研究を軸にした社会認識をひらくカリキュラム研究を継続しつつ、平成21年度は「意欲づくり」、平成22年度は「思考と表現」、平成23年度は「指導と評価」の研究とテーマに迫る視点を変え、主として指導方法について研究し改善に努めてきた。夏季研・定例研等の確かな実践により、単時間における学習の内容や指導方法は充実してきた。しかし、学校現場の社会科授業が改善されたかという、まだ難しい状況にある。

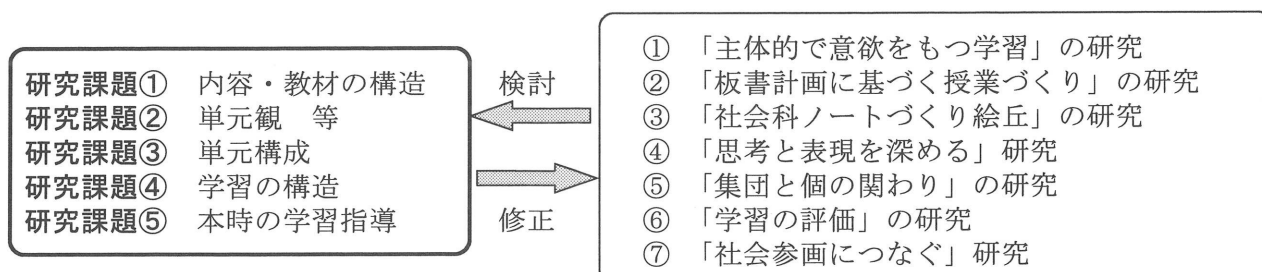


そこで、平成24年度は文部科学省教科調査官・澤井陽介先生のご指導を受け、平成20年度までの研究を生かして、すべての担任が連続的につながりのある社会科授業が展開できるよう「社会認識をひらく指導計画（単元計画）」を作成することにした。香川県下の各学校のカリキュラムの基軸になる「地域版のカリキュラム・指導計画」をつくり、それに自校の特色ある地域教材を取り入れ、授業の日常化に生かしてもらおうと取り組み、その一部を冊子にまとめることができた。すべての学級担任が取り組む社会科であるからこそ、伝統として研究を行ってきた「社会科の本質を求める授業」を目指していきたいと考える。そのために、今まで研究してきた「意欲づくり」「思考と表現」「指導と評価」といった視点を基盤にして、教科書や社会科ノートの活用を生かすことが大切である。そして社会に参画する資質や能力を高める教材については、教科書教材と地域教材を主とし、ネタ的なその場限りの教材は避け、子ども自らが本質を求めているような授業づくりを目指す方向で研究を進めていきたい。

(2) 授業づくりの基本を学び合う方策

平成28年度の全国大会に向け、平成26年度は、今までの成果を踏まえ「授業づくりの基本」を指導計画づくりの過程で学び合うことにより、指導計画を充実するとともに、課題についても明らかにすべく、研究を進めてきた。具体的には、下に挙げる7つの視点から研究を進めつつ、指導計画の中での「内容・教材の構造」「単元観」「単元構成」「学習の構造」「本時の学習指導」のどこに課題が存在するかを検討し、修正を行いたい。その際、「育成すべき資質・能力」についても考慮したい。

(PDCAサイクル)



[参考文献]

- 「授業改革と学力評価」 北尾 倫彦 図書文化社 2008年
- 「子どもの思考力」 滝沢 武久 岩波書店 1984年
- 「考える・まとめる・表現する」 大庭・コティ・さち子 NTT出版 2009年
- 「学ぶ意欲の心理学」 市川 伸一 PHP新書 2001年
- 「学習心理学」 辰野 千寿 教育出版 1994年
- 「社会科ノート」による思考力の育成 香社研 東洋館出版社 2008年
- 「社会認識の系統からみた社会科新单元構成(試案)」 香社研 2008年
- 「自己調整学習の理論」 バリー・J・ジーママン, デイル・H・ジャンク編著 塚野州一編訳 北大路書房 2006年
- 「自己調整学習の実践」 バリー・J・ジーママン, デイル・H・ジャンク編著 塚野州一編訳 北大路書房 2007年
- 「自己調整学習と動機づけ」 バリー・J・ジーママン, デイル・H・ジャンク編著 塚野州一編訳 北大路書房 2009年
- 「自己調整学習の成立過程」 伊藤 崇達 北大路書房 2009年
- 「小学校学習指導要領解説 社会編」 文部科学省 2008年
- 「社会認識教育の構造改革」 社会認識教育学会編 明治図書 2006年
- 初等教育資料 3月号 「社会参画への意欲や態度を形成する教育の推進」 2012年
- 「新しい公共を担う人びと」 奥野 信宏 栗田 卓也 岩波書店 2010年 など
- 「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会一論点整理一」 文部科学省 2014年
- 教育課程の編成に関する基礎的研究 報告書7
- 「資質や能力の包括的育成に向けた教育課程の基準の原理」 国立教育政策研究所 2014年
- 初等教育資料 7月号 鼎談「問題解決的学習の充実をどう図るか」 2014年